

“ 杉山代表の ひとこと ”

認知症と高齢者虐待

「平成27年度 高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況等に関する調査結果」の「養護者による高齢者虐待についての対応状況」項によると、「被虐待高齢者の認知症日常生活自立度」は、「自立又は認知症なし」が1,172名(10.7%)に対し、「認知症自立度Ⅱ以上」が7,549名(69.0%)と認知症高齢者が多いことがわかりました。ちなみに、「要介護施設従事者による高齢者虐待」の項では、「自立又は認知症なし」が23名(3.0%)に対し、「認知症自立度Ⅱ以上」が587名(75.4%)と圧倒的に認知症高齢者が多いことがわかりました。

つまり、「認知症」と「高齢者虐待」は非常に密接に関連していることがわかりました。

次に、「虐待の発生要因」として、最も多かったのは、「虐待者の介護疲れ・介護ストレス」の25.0%、「虐待者の障害・疾病」の23.1%、「被虐待者の認知症の症状」の16.1%、「家庭における経済的困窮(経済的問題)」の14.4%、「被虐待者と虐待者の虐待発生までの人間関係」の12.6%、「虐待者の性格や人格(に基づく言動)」の10.4%となっていました。介護、特に認知症介護における様々な困難さが、「虐待」の背景にあることが明らかになりました。

虐待には、身体的虐待・介護等放棄・心理的虐待・性的虐待・経済的虐待などがありますが、法律ができ関係機関等に対して報告義務が課せられたこともあって、介護上避けられない変化であっても、「虐待」とされるケースも目につくようになりました。「虐待」に注目するあまり、介護者を支えて落ち着いた介護ができるのを任務とする専門職が、介護者を疑ったり追い詰めたりすることの弊害が決して少なくないと思います。

「本人がベッド柵に打ち付けた紫斑をケアマネが見つけて、虐待したのではないかと疑われました」、「仕事を辞めて介護せざるを得なかったのに、親の年金を使い込んでいたと言われました」、「夜中歩き

回ったり、大声を出すので、部屋に鍵をかけたら拘束していると言われました」、「おむつやバルンカテテルを外すので、つなぎの寝間着を着せたら拘束に当たると言われました」など、介護者の嘆きを最近よく聞くようになりました。

確かに、だれが考えても明らかな「虐待」はあります。しかし、子供の養育や教育現場でも、会社でも、類似のことは一定の確率で起こることです。「高齢者虐待」を声高に取り上げている者でも、自分の身内を介護するようになったら、「虐待」にあげられた行為をするに違いありません。

「虐待」という言葉は、上からの目線であると感じます。「虐待」と呼ばずに、「不適切な対応」としたほうが適切だと思います。

「虐待」は、上記のデータのように、大部分が認知症高齢者に対して発生しています。

その最大の理由は、①認知症の症状の理解や対応の仕方が難しいこと(理解が深まれば介護の混乱は軽くなります) ②暴言や暴力、大声などの症状を示す認知症高齢者を、介護サービスが平気で排除すること、したがって 介護が最も大変な時に介護者が孤立して対応せざるを得ないこと(逆に言えば、本当に困った時、デイサービスやショートステイ、入所、入院で対応してもらえれば、介護者が「虐待」行為に走ることはない) ③認知症の人は身近な介護者にひどい症状を出し、たまに会う人、目上の人にはしっかりした対応をするという特徴があるため、周囲の人は介護者の苦勞が理解できない、したがって介護者が精神的にも孤立すること ④24時間介護が必要なため仕事を辞めざるを得なくなる場合が少なくない などによると思います。

私たちが大切にしなければならないのは、要介護者(特に認知症の人)とその家族の立場を十分理解して、ともに悩み、解決しようとする姿勢ではないでしょうか。疑ったり、非難することでは問題の解決は得られないと思います。

あとがき

編集委員
石毛・小林(俊)・
田村・山田

研修旅行の付き添いで骨折するという笑い話にもならない失態で、ご迷惑やご心配をお掛けしました。でも、思った以上に経過は順調です。(田村)